



同志社人物誌 (48)

池袋清風

河野仁昭

治期にあつては、旧弊が目立つに至つたのである。確立期以降の組織が保守的な性格を帯びるのは、和歌にのみ限られることではない。その桂園派は、薩摩に同派の指導的な人もいて、明治初期から宮中御歌所の主流になった。公家社会の没落もその一因であつたろう。

池袋清風は、野にある桂園派歌人として、同派の最後を飾つた人であつた。

1

近代短歌の歴史は、与謝野鉄幹、正岡子規らによる新派和歌の勃興から叙述され、それ以前については、前史としてごく簡単に触れるだけというのが普通である。「近代」に重点を置かざりそうならざるを得ないだろう。しかし、伝統文学としての和歌の歴史を顧みる場合には、当然ながら事情は変つてくる。

同志社別科神学科出身の歌人池袋清風は、「乾土荒蕪の野を新に開墾し之に香川（景樹―桂園派創始者）の水を引きよく萌易き八田（知紀―桂園派歌人）の種を蒔き其苗を植付

たるにて先年出版したる浅瀬の波は其新田の収獲にて候（中略）既に桂門は世に知られたりければ香川の流れを汲まんと欲し或は欲せずとも世人に向つて此水を勧めて飲ましむるものなかる可からず」（正宗敦夫「池袋清風大人」と、井上通泰宛の書簡で自ら語つてゐる）ように、旧派に属する歌人であり、指導者であつた。

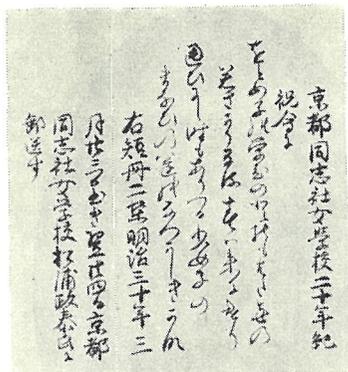
江戸時代後期に、香川景樹が京都で創始した桂園派は、二条・冷泉を主流とする歌風に對して、目覚しく新しい革新的な流派であつた。しかしさすがに欧米文化の撰取に急な明

2

池袋清風は日向国都城（現都城市）の人で、弘化四（一八四七）年四月に生まれた。祖父清芳は歌人、父逸民は領主島津公の学問指導役をつとめる漢学者で、家庭環境に恵まれ、幼少期から和歌、漢学、武芸を学んだ。しかし、元来が虚弱体質で病臥することが多く、明治維新後は鹿児島へ出て漢学の私塾を開業して父のすすめで、鹿児島医学校へ入学した。健康を案じる父の配慮によるものである。清風が初めて英学に接したのはこのときだが、相変らず病臥することが多く、修学の実はいまさらあがらなかつたようだ。加えて明治十年の西南戦争で、医学校は全焼し、自ら

の百冊余の英書も失うという悲運にあい、途半ばにして挫折を余儀無くされた。

彼が同志社英学校へ入学したのは明治十三年九月である。その前年四月に就職したばかりの鹿兒島女子師範学校教員の職を抛つての上洛であった。英学修得が目的であったが、入学時にすでに三十四歳であった上に、外国人教員に対する日本語教授のアルバイト、時間をかけての克明な日記記述、体質改善のための一三日の水浴、寮での短歌指導、第二公会での奉仕などに時間とエネルギーを費し、肝心の英学はみじめなほど進歩せず、明治十五年六月を以って、退学の余儀なき状態



「清風日記」の一部

にいたった。無類の寒がり屋であった彼は、夏も綿入の着物を着て亀のように背を丸めて首をすくめ、火鉢を手放さない一方、四季を通じて一日三回、冷水に浸った。水浴のときは必ず帽子をかぶっていたが、それは頭には水をかぶると風邪をひくと信じていたからだという。彼の奇行が同志社ボーイの語り草になっていたことは、松浦政泰の『同志社ローマンス』に詳しい。

英学校を退学した彼は、幸いその年別科神学科が創設されたので入学した。同科は邦語で神学その他を教授したから、清風もその学習は困難でなく、十八年六月に卒業したものの、殆んど満足感を覚えていなかったことは、終生彼が敬愛した同志社教員下村孝太郎宛の手紙に明らかである。卒業しても、級友のように伝道者にはならず、職を求めて地方に赴くでもなかった。理由は同志社で英学を学ぶためである。明治十四年五月に、M.L.ゴードンから新島襄の母堂、原田助、片桐清治、三宅荒毅、木村経夫と共に洗礼を受け(原田「踏来五十年」)、第二公会の執事も勤めた清風は、伝道師としての働きも当然であった。

生活の手段を講じる必要があったため、卒業の年から月給十円で同志社女学校の教員となり、漢籍、物理、作文を教え、余暇に外国人教員の英会話に出席した。しかし教務多忙で、英学に割く時間はほとんど得られなかった。「生ハ若シ今後猶不運志学遅引シ幸機ヲ失スルトキハ唯一死アランノミ、死ナズハ必為サン、決シテ其中間ニ居ラザルベシ。故ニ今ハ一日モ早く英学ニ進ミ、今日優勝劣敗ノ世、独立独行ヲ得ル自由ノ身ト為ラン」(下村孝太郎宛、明治19・6・12)と決意を告げた彼であったが、十九年からは和漢学教員の月給は僅か五円と定められたこともあり、一年で退職した。そして生計費を得るため外国人教員に日本語教授を行なうなどで、英学に専念する時間はいよいよ乏しくなり、その夢は遠退くのみであった。

3 宿志の英学をマスターする悲願を達成すべくもない理由は、生活費を得るために働く必要があったことと四十歳という年齢にあったが、いまひとつは和歌にあった。

鹿兒島時代に桂園派の歌人鎌田正夫の知遇

をえて上達著しかった清風は、英学修得のために入學した同志社でも和歌を捨てなかつた。加えて、入學の翌年から第二寮の居室で、希望者に手ほどきを始め、徐々に教を乞う者が増加したので、別科神学科時代には寮山子の舎を結成した。彼の指導を受けた人には、新島是水、本圀寺住職三村日脩をはじめ、湯浅吉郎、大西祝、磯貝由太郎、岸本能武太、安部磯雄、徳富健二郎、新原俊秀、重見周吉らがいた。女学校教員になって以後は、女性の門人も加わり、松田道、高松仙、中島茂らがグループをつくって指導を乞うている。清風の指導法は、湯浅吉郎によれば次のようであった。

「毎週二十首位作って、何時も二題であるから、一題三首つづ六首選んで互に持寄りそれを清書して一冊の草稿を作った。勿論作った人の名は記さず、土曜日の晩七時頃、第二寮の二階に居た池袋氏の前に提出したのだ。そして池袋氏は忽ち朱筆を採って直し始め、その歌の傍に細評を書き記しそれが一通り終ると、僕等に向つて次の題を披露し、それから古今の歌の話をせられたが、此の話は非常に為になつた。再び草稿を開いて点を付ける

のであつた」(「池袋清風氏と和歌の研究」)

歌会を兼ねた和文学の学習会で、こうした指導を受けることがなかつたら、湯浅の近代詩最初の個人詩集『十二の石塚』は、或は生まれなかつたかも知れない。大西祝の歌論や磯貝由太郎の詩論も書かれなかつたかも知れないのである。

それにしても、清風が和歌の指導に費す時間とエネルギーは、なまやさしいものではなかつたはずだ。おまけに、本圀寺その他へ指導に出かける日があり、色紙や短冊の揮毫の依頼にも応じなければならなかつた。

彼をよく知る教員市原盛宏やD・C・グリーンは、英学よりもむしろ和文学で一芸をたてることを忠告したが、「未時来ラサレバ之ヲ用意スルモ目的覚スナシ」(「清風日記」明治十七年)と、彼は応じている。おそらく英学への執着のためであつた。

だが、彼の英学はもはや見果てぬ夢に終りつゝあつた。門人たちの作品を選び、自らの作品をそれに加えて、『浅瀬の波』初篇上下二冊の編纂に彼が着手したのは、おそらく女学校退職後まもない時期からである。英学の夢は捨てていなかつたであろうが、明治二十

一年六月に刊行したその歌集が、彼を一派の宗匠たらしめたのであつた。まさしくそれは天分の開花であつた。

幸運にもその歌集を上梓したときから、彼は同志社図書館(現有終館)図書館の職をえて、生活も一応安定した。この年から二十七年六月、結婚して大阪に居を移して退職するまでの間が、歌人池袋清風のもつとも充実した活躍期である。門人は京都を中心に全国に広がり、その数千名を超えるともいわれた。勤務の余暇は通信指導と歌論の執筆に没頭することになる。『浅瀬の波』上梓以後の主要な業績は次のとおりである。

「和歌概論」(「東京日日新聞」明治21年6月)7月)

「和歌の略史」(「郵便報知新聞」明治21年8月)

「新体詩批評」(「国民之友」明治22年1)4月)

「女子の文学」(「女学雑誌」明治22年4月)

「和歌ノ趣向ヲ論ズ」(「国民之友」明治23年3)4月)

「新島襄先生の和歌」(同右 明治24年2月)

「古代和歌史」(同右 明治25年1)2月)

「古代勅撰和歌批評」(同右 明治25年2月4日)

『浅瀬の波』第二篇上(明治27年4月)
「税所敦子刀自を憶ふ」(「国民新聞」 明治33年3月)

自作および門人の作品批評を随時掲げた新聞雑誌は、「読売新聞」「女学雑誌」「同志社文学」「福音新報」「家庭雑誌」その他である。彼は、当代第一級の和歌の宗匠および歌論家としての声価をおつめるに至った。

そうした彼の最も大きな功績は、香川景樹以来京都を中心に門人を擁してきた桂園派が、遷都にもなつて東京に中心が移り、しかも宮中御歌所の中核を形成することによって民間の歌人から遊離しつつあったとき、京都でそれを復興したことにあった。彼は決して既成歌人を糾合することによってそれをなして遂げたのではなく、ほとんど和歌の素養のない書生たちを導いて、文明開化の波濤のなかで復興に成功したのであった。

その歌論において、たとえば新体詩の先蹤と評価してよい外山正一らの『新体詩抄』(明治15年8月)を酷評し、「詩ニモアラス歌ニモアラス又文章ニモアラス而モ其辞甚拙劣

鄙陋ニシテ読ムニ堪エス」という彼は、当時

としては最も委曲を尽したその批評文を公表して、それらの作品は季節を無視していること、訳者に風雅を解する資質がないこと、詩語が生硬難雑であることなどを逐一あげて痛罵した。詩は翻訳できないものというのが彼の考えであり、あるいはそのとおりであろうが、長い年月英学を志してきた人にしては、あまりに伝統的な詩観に執しすぎていたといわねばならぬだろう。門人の指導においてもそうであり、歌題は花鳥風月であり、詩語は漢語や俗語を厳に排してやまことばを好み、また、一見無意味とも見える枕詞の有意をとなえた。天然の情景に即し、清雅を旨として詠じた彼は、知的人工的な技巧には「新古今和歌集」と、その流れを汲む二条・冷泉の歌風を厳しく否定したのである。

そうはいうものの、彼も矢張り時代の子であった。キリスト教の洗礼を受け、リバイバルを体験した清風は、歌題にもキリスト教をとり入れ、たとえば、

ゆたや野のあさちか露に久かたの月の光の
やとりけるかな

と、マリヤのキリスト懐妊の歌を詠み、また、

旧派歌人が採らなかつた「汽車」なども歌題に採用したほか、時事的な歌も詠むなど、微温的ながら近代歌人の片鱗を示した。

明治二十九年八月、五十歳の清風は老父に孝養を尽くすため、妻子を伴って都城へ帰った。それ以後も通信による指導や執筆に余念なかつたが、和歌の大勢は急速に新派に移り、晩年はかなり淋しかったようである。三十三年七月二十日に永眠した彼とともに、桂園派も終焉したといつてよいであろう。

代表作を二、三首あげておきたい。

山陰の霧のうちより出にけりねくらはなれし鳥のひとむら(朝霧)

風ふけは露とひとつに秋萩のはなもこほる庭のおもかな(庭萩)

はちす葉も水もかれたる古池に木々のおちはのたまる頃哉(池落葉)

在学中に、彰栄館定礎のための歌二首を詠じる榮に浴した清風は、新島襄の晩年には、請われて新島の歌の添削もしている。

都城へ帰って後も、キリスト教会や育児院のために働いている池袋清風は、やはり同志社で育った歌人であった。

(社史史料編集所事務主任)